

咸陽城の東樓（許渾）

一たび 高城に 上れば 万里 愁う

蒹葭 楊柳 汀洲に 似たり

溪雲 初めて 起こつて 日 閣に 沈み

山雨 来らんと 欲して 風 樓に 満つ

鳥は 緑燕に 下る 秦苑の 夕

蝉は 黄葉に 鳴く 漢宮の 秋

行人 問うこと 莫かれ 当年の 事

故国 東来 渭水 流る

一上高城万里愁 蒹葭楊柳似汀洲

溪雲初起日沈閣 山雨欲來風滿樓

鳥下綠燕秦苑夕 蟬鳴黃葉漢宮秋

行人莫問當年事 故國東來渭水流

解説 咸陽城の東の高殿に登つての感慨をうたつたもの。

語釈 ※咸陽城||咸陽は秦の都。 ※万里愁||見渡すかぎりの風物がみなもの寂しくて悲しい思いを起こさせること。 ※蒹葭||おぎとあし。ともに水辺に生ずる草。 ※汀洲||中洲。水中に土砂がつもつて出来た所。 ※溪雲||谷間からわき起こる雲。 ※緑燕||草の青々と生い茂つて荒れた所。 ※秦苑||秦の天子の庭園。 ※漢宮||漢の宮殿。漢の都は長安である。 ※行人||旅人。 ※当年事||その時のこと。その昔秦漢の栄えていた時のことをいう。 ※東来||東に流れること。 ※渭水||渭河ともいう。咸陽と長安の間を東に流れて連関で黄河にそそぐ。

通釈 一たび咸陽城の高い東の高殿に登つて見渡すと、あたり一面の風物はみなもの寂しくて悲しい思いにかられてしまう。おぎやあし、そして、川やなぎの茂った町のありさまは、まるで川の中洲のようになってしまい、昔の盛んであった面影すらない。谷間からの雲がわき起こつたかと思っていると、日は閣のかけに沈み、山の雨がこちらの方までやってくるのか、風が高殿に吹き込んで来た。鳥は草の生い茂つて荒れた所に下りているが、これは昔、秦の天子の庭園だった所の夕暮れの景であり、蝉は黄ばんだ葉の中で鳴いているが、これは昔、漢の王宮であった所の秋の風情である。旅人よ、そのむかし秦漢の盛んだったことを尋ねてくれるな。この秦漢の地は、みな廢墟と化してしまつて、ただ渭水だけが今なお東に向かつて流れているのである。